

---

# 真・恋姫†無双～平成の世から来た者～

光秀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真・恋姫十無双～平成の世から来た者～

### 【ISBN】

9784797

### 【作者名】

光秀

### 【あらすじ】

平成の世から恋姫の世界へと降り立った一人の自衛官。この者が織り成す新たな外史の物語。

## タイムスリップ（前書き）

これからこの作品を連載させていただく『光秀』です。

確認はしておりますが多少の誤字・脱字等があるかもしれません。  
それも含め批判、感想、アドバイス等ありましたら書いてやってください。

目指すは完結！

これからこの作品を読んでいただく皆様と長く付き合っていくことを願います。

## タイムスリップ

俺は荒野の真ん中に一人立っていた。

まわりはまだ明るく少し暖かい。

東から吹く風が俺の長い髪をたなびかせる。

「此処何処だよ？」

思わずそんな声がこぼれる。

まさかこんな所にいるとは……。たしか俺はさつきまで教官に射撃の訓練を受けていたはずだつたんだが。

おそらくといふかまあ間違いなく此処は日本じゃないな。こんな地平線が日本にあるはずはないし。

俺は今の状況にかなり困惑していた。

「とりあえず歩くかな。人に会えればどうにかなるだろ」

「どうやつて俺は歩き出した。特にこれといった目的地もないまま……。

「なんだあれは？」

俺の百メートルぐらい先にはドラマで見るようなカツアゲのシーンが繰り広げられていた。

目を細めてみたところビビッド一人の女性が三人の男共に絡まれているようだった。

俺も普通の人間のためこんな状況を見ればほっておける筈がなかつた。

「おーーーお前！」

「ああー！？」

急いでかけよつた俺の田の前には左からチビ、長身、デブの順に黄色い服を着た男が立つてゐる。この格好を見た俺はますますここが日本ではないと実感させられる。

おつじ。こんな事を考へて居る場合じゃないんだ。

「死にてえのか!? ああ!?」

いかにも悪者ですと言わんばかりの罵声を俺に浴びせてくる。

シュツ！

卷之二

その声とともに長身の男は自らの腹を抱え、その場に蹲つた。その様子を見たチビとテグはあまりの速さに何が起つたのか分かつていなかつた。

なぜ長身が地面に蹲つているかというとそれは俺がこいつの腹に正拳突きをくらわしたからだ。

一時期は十年に一度の逸材などともてはやされていたがそれは昔の事である。

「十数える間にこの場を立ち去れ。……いち一。」

その掛け声とともにテブが長身を背負いチビと一緒に逃げていった。

そして俺は振り返り、さっきまで絡まれていた女性へと声を掛ける。

「大丈夫でしたか？」

「はい。助けていただき有難うござります」

その女性は俺より身長が少し低く、スラッシュした印象を覚えた。髪や眉が白くそれに合わせたのか白いの格好も白い装束を身に纏っていた。

それととても整った顔立ちをしてくる。

「いえいえ。礼には及びませんよ。あつ、でも一つだけお聞きしてもよろしいでしょうか？」

「はい。私が分かる」としたら何でもお聞きください

「じゃあ……此処は何処ですか？」

その質問をぶつけると女性は少し不思議そうにしていた。が、少しうると答えは返ってきた。

「此処は荊州南郡にあります枝江県です」

俺はその返答に少し眉をしかめた。

「少し待つていただけますか？」

「はい……」

俺は少し考えを纏める。

荊州だと? ということは此処は中国か? いやしかしこの人人が適当なことを言つてゐるという事も。

…こやないな。

わざわざの男どもやうの辺り一面に広がる荒野を田の前にして俺はその言葉が事実としか思えなかつた。

そんな俺に一つの単語が思い浮かぶ。

### タイムスリップ

もつもつ考えるしかこの状況に説明がつかなかつた。

でも俺には何も変わつた事は無かつた。

俺にはこの不思議な状況に陥る前の記憶は鮮明に残つてゐるがこれといつてタイムスリップに繋がると思えるよつた出来事は一つも無かつた。

そもそもタイムスリップってこんなに何の前触れもなくおとずれるものなのかな。

「どうかなさいましたか？」

真剣な顔で真剣に悩んでいる俺を見かねたのか女性はさう一言声を掛けてくれた。

「いや。教えて貰ださつ有難うござました」

そつと俺は踵を返しその女性の前から立ち去つとした。

「待つてくださいー。」

俺は後ろを振り返る。

「何処か行く当てがおありますか？」

「いえ、特には」

俺はそう返事をする。

「もしよろしければ私の屋敷に泊りになりませんか？」

女性は淡々とした口調でそう言った。この申し出は俺にとっては願つたり叶つたりであった。が、俺はそれを断つた。

「本当に気にしていただきかないで結構ですから」

俺は軽く微笑みそう言つ。だが彼女は納得していない様子だった。

「それでは私の気持ちが済まないんですー！」

彼女は強い口調でそう言つた。その彼女の剣幕と粘りに負けた俺は頷いた。

「それでは」厚意に甘えさせていただきます

俺は頭を下げた。

「頭を上げてください。本来なら」ひがが頭を下げなければならぬのですから」

そう言つと彼女は深く頭を下げた。

そして頭を上げた彼女は自らの名を名乗つた。だが俺はその名に驚きを隠せなかつた。

「私の『馬良』と申します。真名は『魅面』（みおん）です。助けてくださいた貴方にならこの名を預けれます」

「……」

もしかして、

「馬良…………もしや字を『季常』とこののではないだらつか？」

俺はおそれる馬良と並ぶ女性に尋ねた。もし俺の考えが正しければこの女性さんの質問にイエスと答える筈だ。

そしてそれが意味するのは……

「はい。しかしながら私の事を？」

馬良と並ぶ女性

見渡す限りの荒野

荊州南郡、枝江県

黄巾を纏つた男共

タイムスリップ

多少の違ひはあれどこのワードから導き出される答へは一つしかない。

「三國志……」

「えつ？」

此処は三国志の時代なんだ。

俺は表情こじて出さなかつたが確信を持つたその考えに驚いている。

黄巾の男。これが黄巾党の奴らなら今は後漢末期ということになる。それに俺の目の前にいる女性、性別は違つが馬良と名乗つてゐる。彼女が馬良ならば彼女の眉が白いのにも合点がいった。

「はあ～」

頭をくしゃくしゃ搔きながら俺は溜息をついた。膨大な情報量に今にも頭がパンクしそうだった。

なぜ馬良が襄陽郡ではなく此処にいるのか、なぜ女あのが、などの疑問はまた今度考へることにした。

今考へても思考が追いつかない。

俺は一つ大きな深呼吸をして馬良に言つた。

「すまなかつた。色々考へる事があつたものでな。俺の名は『姜維』字は『伯約』だ。これからよろしく頼む」

俺はひとまずそつ名乗つた。これが三国志の時代ならば俺の本名は不自然だと思つたからだ。

「あと教えてほしいのだが真名つていつのはなんなんだ？」

俺はこの真名とこのに聞き覚えがなかつた。

「不思議な事を言つのですね。真名つてこののは心を許した者にしか教えてはならない神聖な名。人によって価値観は違つと思ひます。が私はそのように認識しております」

この時代にはそんなものがあつたんだな。

馬良、いや『魅音』が俺に真名を預けたとこにはやつたの言葉通り俺に心を許したとこ事なのだらう。

「やつか。じゃあ俺も真名を預けるよ『政義』（まさよし）ついていふんだ」

魅音は俺が真名を教えると少し驚いていた。

「真名を預けていただけるとほ嬉しいです。これからよろしくお願ひしますね」

「ああ」

俺は微笑み手を差し出す。すると魅音も微笑みながら俺の手を握り締める。

この時代にタイムスリップ？してどうなるか分からなかつたがひと

まず、のたれ死ぬことは無やうだ。

俺は安堵しつつ魅音の屋敷へと歩みを進めた。

## タイムスリップ（後書き）

「馬氏の五常白眉もつとも良し」といわれる通り馬良は優秀な馬五人兄弟のなかでも特に秀でていたと言われます。

最初なので次も近々更新したいと思つています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8479z/>

---

真・恋姫†無双～平成の世から来た者～

2011年12月26日20時51分発行